

オイゲン・ヘリゲル著「日本の弓術」岩波文庫 1982年10月18日刊を読む

無私^{むし}の態度 - 武士道精神の根元 -

1. 先生はこの深い集中に到達する仕方を教えた。

- (1) 弓を射る前の一時間はできるだけ静かにして心を凝らし、
正しい呼吸によって心中を平らかにし、
外部のあらゆる影響から次第に身を鎖して行き、
さてそれから冷静に弓を引き、
その他はすべて成るがままにまかせておく。

(2) そのようにして次第に、完全な無我の境に近い状態、したがって無我の境に移りうる状態になる。

(3) 矢が放たれて緊張が弛み、無限の力が活動に入った時に初めて、ふたたび我に引き戻されるのである。

P34

2. 「私のやり方をよく視ていましたか。

(1) 仏陀が瞑想にふけっている絵にあるように、私が目をほとんど閉じていたのを、あなたは見ましたか。

(2) 私は的が次第にぼやけて見えるほど目を閉じる。

(3) すると的は私の方へ近づいて来るように思われる。

(4) そうしてそれは私と一体になる。

(5) これは心を深く凝らさなければ達せられないことである。

(6) 的が私と一体になるならば、それは私が仏陀と一体になることを意味する。

(7) そして私が仏陀と一体になれば、矢は有と非有の不動の中心に、したがってまた的の中心に在ることになる。

(8) 矢が中心に在る——これをわれわれの目覚めた意識をもって解釈すれば、矢は中心から出て中心に入るのである。

(9) それゆえあなたは的を狙わずに自分自身を狙いなさい。

(10) するとあなたはあなた自身と仏陀と的とを同時に射中てます」

P42

3. 日本人にとっては、己れの民族の既成の秩序になんの摩擦もなしに順応するのは当然のことであるのみならず、その秩序のためには自己の生存をさえ泰然として犠牲にし、しかもそのために仰々しく騒ぎ立てられることはない。

(1) ここに初めて、仏教の及ぼした影響の成果と、同時にそれに基づくもろもろの術の持つともなしに持っている教育的な価値の成果とが、明らかに現われる。

(2) この内面の光によって、死も、祖国のためにみずから進んで求める死さえも、崇高な清^{せいふつ}被を受け、同時にあらゆる恐怖は跡方もなく消え失せる。

(3) 仏教ならびにすべて真の術の錬磨が要求する沈思とは、単純に言うならば、現世および自己から訣^{けつべつ}別ができ、無に帰し、しかもそのためかえって無限に充^みたされることを意味する。

(4) これが幾度も修練され、実際に経験されるならば、そして、決定的に理解された思想としてではなく、意識的に持ち出された決意としてでもなく、非有の中の現実の有として生きられるならば、これは死をも、また意識しながら死んで行くことをも、沈思そのものに対するように少しも恐れのないあの自若とした落着きを生み出す。

(5) jijjつ、人間の生存がただ数瞬にして取り消されるものにせよ、あるいは持続するものにせよ、いずれにしてもそれは非有の中の有の実現に移されることに変りはない。

4. 同時に、ここにかの武士道精神の根元がある。

(1) 日本人がこの精神を己れにもっとも特有なものとするのは当然と言っていい。

(2) そのもっとも純粋な象徴は朝日の光の中に散る桜の花びらである。

(3) このように寂然として内心揺ぎもせずに生から己れを解き放つことができるというそのことこそ、終りが初めに流れ入るすべての生存の、唯一ではないが究極の意義を実現し、かつ開示する。

5 . このようにして、弓術の精神を明らかにしようとしたこの試みは、同時にまた、たとえ乏しい暗示に留まるとしても、神秘説のもっとも内面的な本質を射中^てようとする一つの試みともなる。

P63 ~ 66

[コメント]

日本人とは何か、日本人のアイデンティとは何かを考えるときに、阿波師範のもとで日本の弓道を学んだドイツ人オイゲン・ヘリゲル氏の「経験」は示唆に富む。岩波文庫の中の小さな短い書だが、日本国民必読の書と考える。

- 2009 年 2 月 22 日林明夫記 -